

——平成七年

母寧し土筆出づれば土筆摘み 原田 桃里

かつて大野林火先生は、この句の作者、原田桃里氏の宅を訪ねられて、「箸が出たがるおん母の煮し土筆」(昭53)と詠まれた。このとき、土筆を煮られたご母堂は、掲句の頃はすでに高齢。「土筆出づれば土筆摘み」は自然随順の姿。そういう姿に、作者は「母寧し」と安堵の眼を注いでいる。読む者の心にも安らぎがひろがる。

海苔搔女岩の光を剥すごと 荒井 正隆

岩海苔を搔き取っている情景である。自然に育った海苔だから、潮が引いて岩礁が露出している間の作業となる。打ち寄せる波のしぶきを浴びながら、機敏に海苔を搔き取って行くには、それなりの年季が必要とされよう。掲句は、その作業を、潮に濡れ、陽光に濡れ、きらきらとひかる岩礁から、そのひかりの一片を剥がしているようだととらえた。作者の確かな目の働きを覚える。

釘の頭の浮きしを叩く鳥曇 山上カヨ子

ゆるんだ釘を打っているのである。ゆるんだ釘のさまを、頭が浮いた、ととらえたところが面白い。ゆるんだ釘は、何回打ち込んでも何時の間にかゆるんでしまう。少々苛立ち加減でひたすら金槌を使っている作者の姿が目に見え、そういう自分の姿を、いつしか滑稽と作者自身が見たのではないか。そのゆとりが呼び込んだ「鳥曇」なのだ。この句の趣は、「鳥曇」の一語の働きにかかる。

旅立ちの髪切る八十八夜かな 八牧美喜子

旅を前にしての身支度である。髪は美容師の手で整えられているのだが、切られて行く髪に、作者の旅ごころは定まった。体調の問題などで、躊躇されるところがあったのであろうが、いまは、すがすがしい気持ちで旅立ちを待つ作者なのである。折しも八十八夜。春から夏へ季節は移る。時候の推移もまた晴れ晴れとした趣をこの句に添えている。

通夜の法衣雛の間借りて纏ひけり

遠藤 止観

作者の僧形は、「濱」のわたしたちにはすでに親しいものとなっている。この句、呼ばれて赴いた家には雛が飾られていた。その部屋で慌ただしく着替える。取り込んでいる折りだから、ほかに適当な場所がなかったのであるう。それにしても華やかな雛の前とは――。襖一枚隔てた隣の部屋では、すでに親族が集まって行法を待っている。そういう背景も読み取れる。

ハンバーガーコーラと売れり縞日除

今井すえ子

ハンバーガーもコーラも、この国の食文化に溶け込んで根付いてしまった。アメリカ文化の明るい一面を持ち込んだといえようが、その屈託の無さが浸透する力となっているのであるう。この句もまた屈託なく街角のハンバーガー・ショップを描いている。んだら縞の日除が人々を呼び込む。よく売れるコーラとハンバーガー。都会の初夏の――日除が新鮮に見えるのは初夏だ――風物を手際よくとらえた句といえよう。

(宮澤昭彦)

白南風やみづうみが見え海が見え

茂里 正治

湖と海に白南風なら若狭三方五湖の梅丈岳（標高四〇〇）頂上がすぐ眼に浮かぶ。観光道路レインボーラインが容易に運んでくれる頂上、周りを遮るものはなく眺望は極めて良い。眼下の南には三方五湖、北には若狭湾・日本海が広がり、岳越しの白南風が容赦なく吹き募る。正治氏はこの光景を受け止めた心の大らかな真を見事に表している。

ひとりるにぼつんと一つ昼火花 湊 海火

淋しい侘しい寂しいをひつくるめるとこうした表現になろう。海火氏は先年奥様を亡くされた。この句発表のころには既に病状は思わしくなかったと当時の作品から推察される。また、ご自身も病臥勝ちで孤独で遣る瀬ない日々を過ごしておられたようである。昼火花は誰でも淋しさ空しさを感じるが、それより病涯なる孤高の生き態が犇々と心を搏つ。

哭くも秋思笑ふも秋思二面石 坂根白風子

二面石は明日香村橘寺に座る善悪二面を前後に刻んで立っている石のこと。関西では著名である。聖徳太子ご生誕のこの寺の開創からのものかも。風化激しいお顔だが、笑う善相も哭く悪相も充分識別出来、眺めていると止めどなく秋思が湧く感動に捉えられて白風子は佇む。この二面石の表している真とはこれと、私も全くの同感で立ち止まる。

寝足らひし赤子の仰ぐ吹流し 森田 博

熟睡から覚めた赤ん坊が、開け放たれた座敷の先に見える吹流し（鯉幟と見たい）の空に泳ぐ様子を、仰向きに見ているのであろう。十指を絡ませて何か喃語を喋りながらの姿が目につく。赤子の生態の真をよく捉え表している。

盲夫婦 閨名月まつりけり 村越 化石

化石氏ならではの長年の闘病療養にて辿り着かれた澄明な境地が、「閨名月まつりけり」の吐露になったのである。句集『八十八夜』に「俳句を学んできたお蔭で見えない物までが見え、季語や日本語の持つ深さ美しさ面白さを知り、心豊かに人生を生きて来られた」の述懐がある。

めぐり来し山を臉の良夜かな 小谷部東吾

平成十三年五月十八日癌疾にてご他界。私とは同年輩だった。齢六十半ばのこの句、句意は壮健な山歩きであるが、「臉に良夜かな」は思いが籠もり過ぎて寂しさが残り、既に病の兆しの生命の真が見て取れる。
(土田析久男)

——平成八年

肌脱ぎて冬夜踊る師いのちなが寿 金丸 鐵蕉

伊豆で行われた六百号祝賀会の前夜、松崎先生は隠し芸を披露なさった。鐵蕉さんはその夜の印象をすぐ一句となし翌日の記念俳句大会に出句、特選の栄を得た。私は寿を「いのちなが」と読むことをはじめて知り、何と意味深い字があることよと感嘆した。

良寛の一筋町や浪の花 菅沼 義忠

出雲崎は柏崎に続く一本道が町を通る。佐渡行きの港近くに良寛堂はある。背後の青い海の見える広場の真ん中に、二間四方位の小さい御堂が建っている。からりとした広場は良寛様の子供達と毬つきをしたのだらうとそんな想像がうかぶ。風の吹く日は白い浪の花が転がってくる。良寛様はこの一筋町の道を背を丸めて托鉢に歩かれたかと、そんな幻が湧いてきた。

蓮の実の飛びたる先を見失ふ 佐藤喜代子

この作者、何故か蓮田吟行にゆくという句を作る。誰でも吟行地との相性はあるらしい。この一句もいかにも作者らしい。蓮の実が飛んだまでは誰でも作る。飛んだ実の行方を思うところがこの人らしい特質。風の強い海辺の北限の蓮の実はどこまで飛んだのだらう。作者の心は失せた蓮に思いを寄せて読者を誘う。

夜長の灯牛売りで断つ開拓誌 石橋 林石

この句は古い演会員だった開拓青年を詠った一句。希望を託した牛も売り、山を去る準備をしている彼を訪ねてこの句を成した。長い夜を山家の暗い灯のもと、挫折の思いにせずむ開拓俳人の姿がこの句の奥に見える。小説的内容の深味のある一句と思う。

雪白の月山すわる白菜畑 沼沢 破風

月山は普通の山ではない。行者の修行する神の山、「雪白」という文字をもって詠われたことに、作者の月山に対する敬虔な思いが伝わる。そして雪国の人には野菜に私達と違った思いがある。貴重な品なのだ。この白と白は輝き合っている。雪国の人らしい感覚を貫かれた。

水飲んで命を醒ます寒戻り 佐野 美智

たしかに夜の水は身に沁み入る。ましてすべての物の乾き切った冬の水は頭の芯に流れてゆくような感じを覚える。「命を醒ます」と語はゆるがない。日常の一刻を思い深めてこのような感銘句を成し、素晴らしいとこの「醒ます」の一語を復唱している。
(八牧美喜子)

眼の手術終へて髪梳く夜の朧 山部 淑子

風俗的にいえば「眼の手術終へて」は現代風で、「髪梳く夜の朧」は近代風である。昼間の手術は現実的であるが、朧夜の女性の髪梳きは情緒的で、五感に訴え、たおやかで非現実的な

趣さえ感じる。作者の疾患は白内障で現今の医療の進歩により日帰りも出来る。事実この作からあまり危機感は察知出来ない。手術の成功のあとの安堵感が「髪梳く夜の朧」に春夜の情感を漂わせている。

雀の担桶花とも実ともありにけり 黄川田美千穂

作者はこの極く小さなものを「花とも実ともありにけり」と自然の豊かさに感動した。私は作者の視点と合致して共感した。

鳥の恋大仏殿の屋根を落つ 岩井 三青

この大仏殿は作者の地元岐阜の正法寺という寺にある。屋根より滑り落ちた恋の鳥は目白だと思うと作者はいう。地元の大仏殿といつもの馴染みの目白との照合で、その時の情景を活写している。つまり東大寺の大仏殿ではない別の興趣が出ている。

夏来る坂の上より声のあり 村越 化石

作者は特殊の環境と境遇にある。「夏来る」の喜びは吾々の想像以上なものがあろう。表現は気負いがなく平易である。

晩霜報月出て空の蒼きこと 中澤文次郎

「晩霜報」とは晩春にある霜害の予報である。この時期、通常なら臘月であるが、天体の現象では真冬のような蒼白い厳しい冴えが感じられたのである。いま農家が抱く危機感を作者も抱いている。ただひたすらに農作物の平穏を祈るだけである。「晩霜報」という季語が作者をして、中七・下五と一気に滑るように口誦させた。この調べが厳しく美しい。

極楽寺の浄土ヶ池に浮巣かな 西村 琢

鎌倉の極楽寺には「浄土ヶ池」という池はないので、これは他の場所の極楽寺なのであろう。作者は岡山県在住なのでその方面にあるのかも知れない。極楽寺・浄土ヶ池・鳩の浮巣で十分に材料が揃って、仏の安心の世界を現出している。少なくとも読む者を救済している。

鴨塚をふつくり埋むる夏落葉 毛塚 静枝

この鴨塚は浜離宮——正しくは浜離宮恩賜庭園——のものという。浜離宮はもと宮内庁の所管。御獵場があつて鴨の獵をしていたから、その辺にこの鴨塚の由来があるのかもしれない。この「夏落葉」は「常磐木落葉」のこと。松・檜・樟などと限定しなかつたのは、ひとつに決め難いほどの量だったのであらう。また「ふつくり」は「ふつくら」と同意。広い庭園の片隅に眠る鴨塚がしのばれる。

余呉の子の鯰の魚籠を引きずれり 矢澤 寿美

余呉は湖北の賤ヶ岳の北に位置する集落。余呉湖という小さな湖を抱いている。この句の鯰も余呉湖で採れたものであらう。子どもには重いので引きずっているのだ。百科事典を引くと、琵琶湖には特産のビワコオオナマズが、余呉湖にはイワトコナマズが生息しているとある。名のある鯰なのだ。それにしてもこの子ども、余呉の風光と溶け合っている。

羅の着崩れもなき白寿かな 伊藤 京子

羅の句といえば、「羅をゆるやかに着て崩れざる 松本たかし」を思い出す。たかしの句はその着付けのさまをとらえて的確だが、掲句の作者は、羅を着ている人の涼しげな様子を年齢でとらえた。枯れて毅然としている姿に感動を覚えたのであらう。人柄に発する涼しさを、よくとらえた句である。

焼く鮎に山女一串混じりけり 鶴沢千恵子

採れた鮎を焼串に刺して遠火であぶるのは鰯場などでよく見掛ける風景だ。作者はそのなかに山女が一匹まじっているのを見つけた。鮎と山女は生物学上の分類が異なり、斑紋や背鰭の形状も相違する。しかし、いずれも淡水魚であり旬もともに夏。鮎のなかにまじっていてもおかしくはない。たまたま目にしたところを生かした句で、作者の心掛けのよさを示すものであらう。

燈火親し江戸切絵図に吉良屋敷 田口 俊子

「江戸切絵図」は、江戸の街並をいくつかに分割してあらわした地図。詳細なものだが、武家屋敷は大きな面積を占めるのでいやでも目につく。作者の目も、広く区切られた吉良屋敷に吸いつけられたのであろう。吉良は忠臣蔵でおなじみの名前だ。この句の「燈火親し」は、時節の親しさに、既知の名に出会った親しさが重なっている。

まつはる子片手で払ひ稲掛くる 桑原 泰子

稲掛けの光景。稲架が並んで目を浴びている風景を見ると、何かなつかしさを覚える。それほど現在では目にするのが乏しい。コンバインで刈り取るそばから脱穀してしまうからであらう。この句、親は稲掛けに忙しい。小さな子供はかまってもらえないので何かとまつわりつく。その子を片手で払いながら稲掛けに精を出す。今日の晴天が頼みなのだ。いきいきと情景を描いた句だ。

(宮津昭彦)

——平成九年

ふはふはと風に浮きをり破れ蓮 宮津 昭彦

大きな蓮の葉も寒さに遭うや忽ち傷んで惨めな様をさらす。季に移ろう実態を上五中七の十二字に描出して余すところがない。長年磨き込んだ観照のまなざしが透徹した作品。季節季節に順応する自然体といえよう。

夕映えの瀬木に落鮎躍りけり 中山フジ江

南紀・勝浦吟行での所見。たまたま熊野川で「瀬木」という川漁の仕掛けに出逢ったのがきっかけ。急流と呼ばれながら夕映えをのせる緩やかな流れ、そこにひかる落鮎を配し一幅の絵に仕立てた。この人は積極的に処々を訪ねるが、既成概念に頼らず、季節との出合いを大切にしてきた成果。

飛んで来し天の岩戸か山眠る 下田 稔

高千穂の夜神楽を尋ねた作。冬の山肌にはむきだしの大巖がごろつく。さながら手力男命が岩戸を投げ飛ばしたように。神話をふんまえ、目前の景に天の岩戸開きをなぞらえたおおらかな想い。上地への優れた挨拶句として褒めたい一句。

源 太 坂 呼 子 坂 鶴 叫 び 合 ふ 川 村 紫 陽

どこの地名か不案内だが、峠に通じるいくさ道の呼び名か。昔から土地人に馴染まれているのであろう。明るい音感のフレーズを重ね、一つの助詞も使わぬ調べがユーモアを誘う。どこにもいる粗野な鶴が、呼子笛のように喧しく鳴きしきる。風上の親しさを単純化で表出。

赤 な ま こ 黒 な ま こ 早 口 言 葉 め く 堀 田 政 弘

意表を突いた句因のおもしろさに惹かれる。海風を見たり触れたりしての発想であろうか。むしろ仲間達との座で席題の「なまこ」を案じているうち、ふっと口をついて生まれでたもののように思える。なまこという言葉を弄んだ一つの諧謔。誠実一途のこの作者には珍しい遊びどころが愉しめる。

幾 千 の 鶴 唳 四 方 へ 訝 せ り 川 上 な み 子

川上さんはいそいそ出水へ取材に赴き、实景にひたただけの氣息が充滿している。夜明けとともに幾千羽の鶴は一斉に鳴きながら餌場を指して飛び立つらしい。表現上聴覚だけに絞って大景の鶴を活写。緊密な叙し方によって臨場した者の感動が伝わってくる。

(荒井正隆)

一 冬 を 過 せ し 帽 子 な ほ か ぶ る 村 上 一 葉 子

冬は終わったのに、冬の間なじんで来た帽子をそのままかぶっている。単なる惰性か、またはそれなりの愛着があつて手離せないのか。勿論後者であろう。いつもかぶっている帽子には自分の分身のような親しみがある。特に気に入った帽子ならば一入その感が深いのは当然である。帽子好きの人の匂らしいが、この句、「冬」がしっかり定着していて、他の季節では、この味は出ないだろうと思つた。

雲雀揚げ中州の眠氣拵げたり

勝又寿々子

大河の中州の空の雲雀の声。いかにもゆつたりとした感じが、ただでもにぎやかではあるが単調で、腰を下ろして聞いていると眠気を誘われるような雲雀の声ののんびりした風情を、さらにひろがりのあるものにしていてと思った。兩岸の物音もあまり聞こえて来ない静かな空間も感じられ、作者のゆうゆうたる心境も察することが出来る。

病む人へ寄せ書添へて染卵

黒坂綾子

病氣療養中の友人に、回復を祈って何人かの寄せ書きを添えて染卵を贈ったのであろう。復活祭はキリストの復活を祝う日、この日集まったのは、信者の皆さんだろうと思うが、この染卵には、キリストの復活にならって、回復してくれるようにという願いが込められていることがわかる。読後に近代的でしかもあたたかな印象が強く残った。

水草生ふ陰に針撒くごとく稚魚

五十嵐跡夢

水中に群れる魚影が、翻るたびに銀色のひかりを放つ。私はこれを「月のごとく」と表現したことがあるが、この句の稚魚はもっと小さいもの、それだけに密集している状態が想像される。「針撒く」が言い得て妙だと思った。

田植女のはやばや眠る足枕

影島智子

近頃は田植も機械化され、昔のような田植風景は少なくなった。しかし、機械化しても箱苗の準備運搬とか、機械で植え残した所の補植とか、かなりたいへんな仕事をこなさなければならぬようである。その夜だけは、誰はばかりことなく早寝して、疲れた体を休めることになるだろうと思う。「足枕」は体験から生まれたもの、強い説得力がある。

予後の身を透き通すごと河鹿笛

三浦晴子

読後に、一句に流れる澄み切った感覚が、こちらの胸にも流れ込むような思いが残った。回復しつつあるものの、まだ何となく頼りないような、病後のゆれやすい気持ちだが、清らかな、また鋭い河鹿の声に触発されて「身を透き通す」という感覚的な表現を生み出したのだろうと思う。

耳 たてて寝せて機嫌や冷やし馬

八牧美喜子

激しく争い、駆け廻った馬達が、祭を終えて、川に浸され冷たい水で洗われている。ご苦労さまと労りの言葉を掛けられて安らいでいるのが、「耳たてて寝せて」に余すところなく捉えられている。野馬追祭の烈しさを描写した句の多い中で、この句は異色と言えよう。作者の馬へのやさしい思い入れが伝わって来て、私の好きな句である。

一羽づつ名を呼び鶉縄解かれけり

今井すえ子

華やかな一夜のショーを終えた鶉のストレスと疲れは、どんなに大きなものであろう。手塩にかけて育てた鶉の名前を、一羽ずつ呼びながら縄を解いている鶉匠の姿が眼に見えるようである。情景をそのまま技巧を弄せず詠みあげたところに、惹かれた。

術後二十日喜雨のごと浴ぶシャワーかな

毛塚 静枝

この句の主眼は、「喜雨のごと」である。大手術が無事に終わっても、術後の二十日間は何

論のこと、その後も痛みと不安感に苛まれたそうである。日頃から、痛みに弱音を吐かない気丈な作者を知っているだけに、癒える喜びが万感の思いで詠みあげられていて胸を打たれた。

つづれさせ念珠一途に繰る如し

荒井 正隆

庭から部屋の中までも入って来て、いつまでも鳴きすだく蟋蟀は、古来親しまれて、『万葉集』にも多く詠まれている。「念珠一途」に、数珠をつまぐる僧の姿が浮かんでくるが、仏への崇敬の念の厚い正隆氏の姿なのかも知れない。一読、しみじみとしたものを覚える句である。

払暁や眠る子乗する棉車 金丸 鐵蕉

砂漠のオアシスの街、敦煌の郊外での所見という。まだ明け切らない早朝、眠っている幼児を乗せて、出荷を急ぐ棉車である。おそらく、曳いている驢馬を馱しているのは、若い夫婦なのであろう。棉車に揺られて、ぐっすり熟睡している子供の姿が、微笑ましい。シルクロードの旅での一風景が、生き生きと捉えられていて、農民の生活の一面を見ることが出来た。さりげなく叙されていて、感銘した。

山の關 邯鄲の關 真の關 櫻井 康敏

先ず、「邯鄲の關真の關」と疊みかけてくるような言葉に惹かれた。御岳山の邯鄲を聞く吟行会で、御師の宿に泊まったことがあるが、ネオンも街灯も無い山の關は、恐ろしいほど真つ暗である。耳を澄ますと、ビルルルと澄んだ邯鄲の声が聞こえてくる。まるで短い命の証を唱いあげているようで、いつまでも聞き惚れたことを思い出した。關を詠むことで、邯鄲の声を鮮明に表出しているところに感心した。

(伊藤京子)

——平成十年

新蕎麦やあさみどり いやうすみどり 竹内美知子

仲良し二人が蕎麦屋に入り、舌鼓を打ちながら「この蕎麦の色、薄緑ね」「いや浅緑よ」と話が弾んでいるのであろう。薄緑、浅緑、同義語であるが微妙にニュアンスが違ふ。二つの言葉を「いや」という語で繋ぐだけで、巧みに広がりを持たせた点に惹かれた。

妨ぐるものなく山の眠りけり 村越 化石

化石さんとは昭和五十年にお会いしたことがあるが、当時既に失明されていたように記憶している。この句の眠る山は心眼で眺められたのである。それだけに「妨ぐるものなく」に心打たれるのである。

ふはふはと来てふうはりと雪蛩 田中 菅子

「ふはふはと来てふうはりと」はいかにも綿虫の舞う様に相應しく、句から伝わるものは明るさだけで、じめじめしたものは少しも無い。この句を作られた頃の菅子さんは入院中で、一日、その病床を見舞ったが、雪蛩の句のように明るく元気で、翌年二月に故人になられるなんてことは夢にも思わず、又元気で共に句作に励もうと思っていただけに、その死の悲しみは深かった。

寒卵いのちいいいよ重きかな 下田 稔

寒卯の重みに命の重みを感じられる。節分の豆を噛み締めて何が何でも癒えるのだと自らに言い聞かせている作者のお姿が彷彿として浮かび上がってくる。

鍛冶町より 鋳物師町へ 注連貫 田中 英子

城下町や宿場町であつた所に今も名前だけが残されている。いかにも子供たちが取り払った門松や注連飾りを集めて左義長で焼く、注連貫いに相應しい町名で、固有名詞は季語と同じ重さでを心掛けていられる方のお句らしい。

懸想文 開くに 大きな息ひとつ 谿 昭哉

京都市左京区の修験宗の総本山聖護院の前に、須賀神社と称する小社があり、毎年節分の日には白覆面、水干、烏帽子の装束で、梅の小枝に懸想文と称するお札を吊るし売り歩く懸想文売りが出て賑わう。谿さんは、その須賀神社に詣で、懸想文売りから懸想文を買ったが、凶か吉かの不安と、恋文の内容の期待感で思わず大きな溜息をついたというのである。作者の姿彷彿とし、思わず笑みの浮かぶ句である。

(茂里正治)

山茱萸の花の黄 沈む 鄙曇り 高澤 良一

横浜市港南区に山茱萸屋敷と呼ばれている屋敷があり、そこへの吟行と思われる。山茱萸は、ミズキ科の落葉小高木なのだが、この古いお屋敷のは背丈よりも高く、満開の時は屋根が黄に沈むような景となる。早春のこの時分、曇天が多く何となく重々しくなる空気を氏ならではの確な眼のたしかさで表現している。「鄙曇り」が大層きいている、この花、何かを待つ明るさのある花だ。

書を脇に 若者のごと 青き 踏む 茂里 正治

「本買へば表紙が匂ふ雪の暮」という林火先生の句があるが、本を買うのは胸のときめくものだ。氏も新刊書を脇に胸をときめかせて野へ出たのだろう。少してれてことさら「若者のごと」と言っているが、好奇心と期待感は何歳になっても忘れてならないことだと思う。青き踏むがきいている。「青」の持つ力か。

弥次郎兵衛傾きしまま春の闇 中川 美亀

この句、ロマンを追求する氏の心中そのものと言いたい。弥次郎兵衛は多分置かれた時から傾いていたものだろうが、或る夜半、閉じた眼裏に傾いた弥次郎兵衛が浮かんだ。氏の心のあやうさそのもののように。それを別な冷静な眼が見てしまった。春の闇という季語にはそんな深さがある。そのむずかしい季語を弥次郎兵衛という玩具を配して上手にこなしている。配合の面白さだ。

連翹や路地こまごまと小石川 小谷部東吾

小石川は私の父の生まれた土地なので聞くだけでなつかしい地名だ。連翹は江戸時代から庭木や垣として植えられていて小石川のような古い地には多い。鮮黄色の花は春そのもののような明るさを路地に振りまいている。角帽の書生さんが玄關の引戸をがらりと開けて下駄ばきで出て来そうな句。連翹・路地・小石川、他の名詞に置き替えて見ても駄目。短編小説が出来そうな景。

石舞台己れを隠す臃吐く 山上カヨ子

飛鳥の石舞台は上四下方墳。巨大な横穴式石室は露出し、あの時代の一大権力者蘇我馬子の墓と伝えられている。中に入るとその巨大さに圧しつぶされそうな気がする。春の夕、飛鳥一円が霞に包まれた。それはきつとあの石室が吐き出したにちがいない、己を隠すため。何と言いつても妙だ。氏の気持ちのやさしさがあの陰謀うずまくどろどろとした世界を隠してしまっていたのだらう。なぜならば春の宵だから。

夜蛙の日々を重ねて老いゆくか 土田祈久男

田植を待つ水を張った田圃で暖かな夜、コロコロコロと蛙が鳴いている。ちょっと居眠りでも出たのか「おやおれも歳かな」なんて、あたりを見廻している氏の姿が浮かんでくる。それは決して認めたくない気持ちと諾っている自分がいる静かで平和な夜なのだ。静かで暖かな平和な日常の日々なのだから、ゆっくりとゆっくりと時間が過ぎてほしい。こんな心の中にふと浮かんだつぶやきのような句、好ましい。

郭公や富士川はさみ師弟句碑 川村 紫陽

林火先生の「枯れふかむ山をやまびともつくづく見る」の句碑は内船駅ないぶねの背山の内船寺境内に建てられている。松崎先生の句碑は「友と仰ぐ盆中の富士西行忌」、西行峠に建立された。季語の郭公に親しみが湧き、師弟句碑に呼応し、どっしりした句である。

鵜飼果てカーテンコールと鵜の並ぶ 津野美都江

城北支部の仲間と長良川に遊んだときの作である。鵜飼が終わり、ふなべりに鵜が一行に並ぶさま、なお簀に映える見事な景をカーテンコールと捉えた。これ以上の表現はない。

野馬追終へただちに馬の売られけり 八牧美喜子

野馬追祭の最終日に参加した馬が神社に疾走し戻るさまは一絵巻を見るよう。その野馬追の主役を勤めた馬が直ちに糶にかけられて売られゆくのは哀れである。この景をまのあたりにした作者の直截、ズバリと表現したところに力強い句となった。なお、言葉はやさしく気張ると

ころがない。勉強させられる句だ。

あと十日海霧が去らねば凶作か 笠井 操

海霧は特に北海道では道東・オホーツク海岸に発生する。海霧が発生すると約二カ月は晴れる日が少ない。一種の冷夏である。農家の方は毎年この時期を考慮して、種蒔き、収穫日を見込む。従って海霧の去るのが十日遅れると農作物に影響し凶作になりかねない。きわめて深刻である。この心理を巧みにとらえている。

ふるさとの山河巻きあげ青簾 佐藤 静悟

この句のポイントは中七の「山河巻きあげ」である。この「青簾」も芝居・劇場などで使う緞帳を巻きあげ巻きおろす幕で、上五に置いた「ふるさと」を見事に切りとり、リズム感が出た。

百日紅金屋子祀る屋敷神 升田ヤス子

金屋子神とは踏鞴師・鍛冶師・鑄物師などの信する職業神。鉄の神・火の神といわれる。この金屋子神を祀つてある屋敷神、さぞ立派なお屋敷であろう。百日紅を上五に置いたことにより、百日紅の小花の赤さが、たたら製鉄の火と通じ金屋子神が引き立ち、一句に重みが出た。

(中山砂光子)

——平成十一年

いちどきに鬼灯染まる火山冷え 中澤文次郎

火山の冷えは、燎原の火の如き紅葉を伴れ、奔馬の如く一氣に山を駆け下る。冷えは、千鈞の重みをなし里山を覆い尽くし、なお余りある冷えは村里をひたひたと浸す。圍繞する山垣には、紅葉が朱き山津浪をなし赫奕と息づいている。時どり寸土には、熾り立つ炭火の如き鬼灯は叢をなし、風の中に意志の如くに劇しく瞬いている。美しき瓦解を辛うじて止めている危うい均衡の秩序は、火山を畏怖し敬う里人の勁い矜持に他ならない。

耳しひの耳から眠る霜夜かな 関川 竹四

ここ暫く、音韻は歴々と耳の奥処を敲いては呉れない。耳の穴は既に洞となり、闇を湛えて重い。重たき闇のどよもしは耳鼓、鼓膜を敲かず、直下に魂の暗部を揺さぶり、暗澹の淵へと引きずり込む。寝返る度に闇が寂寞の声を洩らしつつ雫れ落ちる。魍魅魍魎にがんじがらめに羽交締めになれ、翻弄されて生きてゆく身には、放下の眠りこそが呪縛を通れる唯一つの安寧なのである。日がな一日立ち尽くした耳は、重たき闇に蹂躪され疲弊し、ひたすらなる眠りを欲している。折から霜夜、胎児の如く、勾玉の如く身をまるめ、遠い昔のたのしい夢を見るべく、深き眠りへと赴くのである。

大根煮る足るも足らぬも仏より 内海 弘喜

物を欲らぬ諦観は、万象の有り様のまま享受し、それに何らのほからいも差配もさしはさまず、己の裡に発する、不浄の想念の限りを放擲し去った達観の姿には、その立居振舞いにも従容の潔さとすがすがしさが添い、纏うている仄かな光には帰依のはるけさが揺曳する。足るも足らぬも御仏の思し召しである。

鯉揚げに焚火の薪を積み上ぐる 田畑 幸子

水を落とした養鯉池には有象無象の鯉が、泥を金銀に染め、跳ね返り、のたうっている。胴長を鎧うた男たちが、錦を色濃く佩く大鯉を泥の中より抜き上げ、抱え上ぐる。傍らでは、大襤褸で掬い上げられた鯉が、みしみしと、ぎしぎしと鳴動し、襤褸をひしゃげんばかりに摸めている。泥の栄えを浴び、鯉の吐く熱き息を浴び、男たちは徐々に高潮し沸点に達する。こうした、修羅を経た男たちのひたぶる魂を鎮めるべく、この日のために伐り出し、大焚火に供すべき薪が、いま、池塘に豊かに馥郁と積まれ、日輪より降り注ぐ光のつぶての祝福を受けているのである。

青鷹もろがえり 水 楢 に 鳴 る 山 の 風 林 香燿子

若鷹は鋭い刃物の如く天空を翔け、金属光を発しつつ疾風を切り裂く。切り裂かれた疾風は水楢を打ち轟々と鳴り渡る。なおも生きている疾風は天壁を打ち返し、鍛え抜かれた鋼の如く更に力を得て翻り、再び若鷹と烈しく切り結ぶのである。迎え撃つ若鷹、また、裂帛の眼光と、宇宙をも切り裂かんとする剛直な翼を衝いて、それに鮮烈に応えるのである。

酢 茎 樽 翠黛山すいたい よりの 粉 雪 舞 ふ 杉山やす子

井筒を水の昇るが如く、酢茎の樽を玲瓏と水が差しのぼる。水は悠揚と蓋の上にせり上がり、鬱然と基石をも浸し、けむりの如く揺蕩うている。樽の外側には酸味の勝った水が滲み出て、いにしえの匂いを醸し出している。滲み出た塩跡は、遠き山なみの如き起伏を点綴する。その濃淡はつましく奥床しい。翠黛山より舞い降りる粉雪も、また、薄墨色を帯び、そこはかなき切なさが仄めく。
(森田 博)

古 墳 み な 口 開 け て ゐ る 臈 かな 富田みのる

古墳が口を開けているというフレーズは、やさしい言葉ながら、羨道の奥に眠っている古代人の霊と現代人を結びつける力強い表現に外ならない。古墳の口といえばそれまでのこと、口開けていると凝視したところに、作者の優れた感性を見ることが出来る。おぼおぼしいイマジネーションの世界で、われわれも一緒になつて火を開き、さんざめくことにしよう。

野 水 仙 百 尺 下 に 波 く だ け 川村 紫陽

この句ほどイメージのきっちりした句も珍しい。一読、越前岬海岸へ思いは馳せる。力感溢れた断崖を、馥郁と香り高い野水仙が、清楚な花と美しい緑の葉で埋め尽くしているのである。

百尺下の断崖を打つ怒濤は、北斎の「神奈川沖浪裏」を連想させ、殷々と響く濤音の生む風は、野水仙の香りを一層引き立たせている。二者衝撃ともいふべき見事な写生句である。

白木蓮の笑ひ疲れしごとく散る 櫻井 康敏

白木蓮の白は春の魁の白である。冬の名残の固い大気の中に、鮮やかな白を覗かせる蕾は硬質の白磁を思わせる。勾玉に似た形は一種の高貴さを呈している。辛夷よりも早く覗いた白は、純白のまま大きな花びらを開くのである。充実した誇り高い梢は、突如という感じで花冠が乱れてくる。俄に生物臭が深まるものこの頃である。焦げ色になった花びらが地を汚す。「笑ひ疲れし」の比喩が異色である。

花衣 アイロンに張り取戻す 千葉 冴子

着物なのか洋服なのか、独断で洋服としよう。ウールでも化学繊維でも霧を吹いてシュッとアイロンを動かす。きれいに伸びたウールはふつくと深い味わいを取り戻し、ポリエステルは艶やかな色気を拡げていく。衣紋掛に吊して熱の冷めていくのを眺めながら束の間おんな冥利のような感覚を味わうのだ。

枕上ミ泰山ありておぼろ濃し 田中 英子

泰山は、山東省泰安の北方にある名山である。秦の始皇帝もこの山頂で封禪の儀式を行った。天空への七千段の石段は恰かも巨大な昇竜の感がある。今はロープウェイで南天門まで行くことが出来る。掲句は泰山府君の靈力に依って得た作者の最高傑作である。

罔象女夜は螢火を伴れて舞ふ 土田析久男

美しい句である。男性の句とは思えない。暗闇の中で舞う罔象女は、天衣を翻しながら遊ぶ飛天さながらである。罔象女の舞に伴い、浮き、或いは沈む螢が目に見えるようである。罔象女と螢の取り合わせが幻想的な世界を堪能させてくれるのである。 (山上カヨ子)

強情を張り来しおもひ金葎 井上千女

「金葎」と特定した俳句は歳時記を見ても意外と少なく、貴重な一句であると思う。この句、三千女さんの心の奥に持つもの、それを自己客観して得たものを金葎の強さに託して詠った俳

句であるが、普段の彼女を知るものにとってはその意外性に驚かされる。

うやむやの関跡に咲くからすうり

八牧美喜子

有耶無耶の関は山形・宮城の県境にある笹谷峠のそばにあった古関。一山を越えれば八牧さんの実家のある七ヶ宿町で、戦争末期に疎開をしていた土地でもある。烏瓜の花は夜開いて朝しぼむ神秘的な花。八牧さんは幼くして父を亡くされ、故里に対しては淡い思い出しかないに違いない。関跡に開く妖しげな白花は、何か物悲しい雰囲気をかもし出している。

踊り焼きの鮑に誰も無口なる

深野カツイ

活き鮑を貝殻ごと金網の上のにのせて焼いて食べるのだが、この新鮮さを取り柄とする人間の知恵も、反面、人間の無惨かつ傲慢さを想起させる。私なども活け造りは苦手である。そうした心理描写が「誰も無口なる」の表現となった。「踊り焼き」の用語であるが、辞書にはない。「躍り食い」を転じた意味で、地方で使われていた言葉として納得したことを記しておきたい。

橋 普請 映をつなぎし鯉のぼり

武子都史郎

この橋は茨城県奥久慈の水府村にある「竜神大吊橋」で、長さ三七五メートル、高さ一〇〇メートル。歩道用としては日本一を誇る吊橋だ。ある日その橋が修理されていた。橋の下は竜神ダム。一面の緑に染まる新緑のダムの上に、約八百の鯉のぼりが幾筋にも吊り下げられるイベントはなかなか勇壮である。「映をつなぎし鯉のぼり」はその景観を表現したもので、むしろかしい大きな景色を色彩ゆたかに纏められている。

仰ぐ星 夜露の粒の大きさに

宮津 昭彦

大空を見上げると星の輝きが見える。幾光年も経たきらめきだ。ふと足許を見ると夜露が粒々をなして光っている。実は、恒星はとてつもない大きさであり、眼前の露は微小の固まりでしかない。作者はそうした対比とか、照応とかの理屈めいた言葉を一切使わずに、星が「夜露の粒の大きさ」と同じと言い切ることに徹する。その昭彦俳句の純粋性に私は惹かれるのだ。

道普請 小鳥の群のわたるなり 金子 篤子

「道普請」とはなつかしい響きの言葉である。もともと「普請」は仏語で、禪寺であまねく大衆に請うて堂塔の建築などの労役に従事してもらうことで、転じて一般に屋根普請、道普請などと呼ばれるようになった。この語感、都会的ではなく、何となく田園的な背景を感じさせる。その道路をせつせと修理する人間。小鳥は空を飛ぶもので道路とはまったく無関係である。その二つの取り合わせに滑稽味が滲みでている。

(金丸鎌蕉)

——平成十二年

片蔭の切れ目 白刃を潜るごとし 中澤文次郎

真夏の午後、ようやく生まれた片蔭を拾いながら道を行く。家家の蔭、塀の蔭、町並は続いていても蔭は途切れ途切れ。その切れ目に差し込む日差しは片蔭のゆえに却って強い。その日差しを浴びた瞬間の表情が「白刃を潜る」であり、その言葉の選択が「片蔭」という季語の本質を表現している。

昼の鵲はつきばつきと萩刈られ 神長 裕子

この句は萩を刈るという作業とそれに驚く鵲によって構成されているが、実は音の響き合いがまことに巧妙に表現されている。花を終えた萩が刈られる音は「ばつきばつき」であり、低音で一定のリズムをもって続く音。片方、鵲の声は一瞬の鋭い高音。作者はその音の交叉の中に秋の深まりを確実に感じ取っているのである。

たをやかに風をうけとむ実むらさき 黄川田美千穂

紫式部の実がすっかり色づいてきた。紫式部とはまことに巧く名づけた名であり、その華やかな紫色は王朝時代の十二単の佳人を見る感じに他ならない。しかもその枝枝は盛り上がるほど多くの実をつける。風が吹けばその紫色はまさに「たをやか」に揺れるであろう。しかも「うけとむ」ほどの芯の強さを枝に秘めている。

重石もて生簀沈ます夜寒星 波多野蟻仗

湖の一角。今日獲った魚を生簀に収め、重石を着けて暗い水に沈ませる。その生簀は恐らく黒く塗った籠状のものであらう。「重石」「沈ます」という表現が一層四辺の暗さ、静かさを強調する。その暗さのなかに唯一、光るのが「夜寒星」。生簀を沈ませ終えて帰路につく男の影がさながら版画のように描かれている。

雁や浪の中から浪の音 原田 桃里

海を渡ってゆく雁の群。波浪は雁が飛んできたシベリアから吹く風によって起こされ、無限の波列を形成しながら風下へと進んでいく。ある浪は咆哮するかのように白く崩れて音をたて、ある波は耐え忍ぶかのように沈黙する。雁もまたその波音を確かめながら日本への旅路を辿るに違いない。「雁や」の切字が暗い海を想像させる。

臘梅に沼のひかりのまつはれる 宮津 昭彦

臘梅の花のあの穏やかな光沢はいつたい何だろう。枝に密着して下を向いて咲いているが、その姿を遠くから見ると梅とあまり変わりはない。しかし、近寄ってとくと眺めると、その肌色は玲瓏。まさに沼の鈍い光をそのまま湛えたような半透明の花弁が精巧に仕組まれている。

沼の光がその肌色に惹かれてまつわりついているとしか思いようがない。 (坂根白風子)

楮剥ぐ女衆おんなの声湯気の中 山上カヨ子

同時発表の句から見て、茨城県山方町の西の内和紙の工房で詠まれたものであらう。西の内和紙は水戸の二代藩主光圀による『大日本史』の編纂用紙として使われたことで有名である。さして広くもない紙漉工房、作者が覗いてみるともうもうと立ちこめる湯気の中で、蒸した楮の皮を剥ぐ女衆の声がする。姿は見えない。紙漉の作業風景を白い湯気と女衆の声に絞って表現し、臨場感の溢れる句となった。

パソコンの将棋に負けて湯冷めせり 堀田 政弘

将棋は勝負の世界。たとえパソコンであっても負けるのは口惜しい。ついつい一所懸命になり、気がついてみるとすっかり湯冷めをしてしまっていた。パソコンゲームに夢中になるのは大人も子供も同じ。その過程を「湯冷め」で締め括ったところ、飄逸であり微笑を誘う。作者の真面目なお人柄が浮かび上がってくる。

「雛見せてけらつしやい」とて廊下過ぐ

沼沢 破風

山形県を縦貫し酒田から日本海に注ぐ最上川。その流域の町には立派な古代雛を持っている家が多い。江戸時代、京都との紅花の取引によるものである。この句は作者の住む尾花沢の光景であろうか。家人の座っている茶の間の前の廊下を雛見の女の子が通って行く。「雛みせてけらつしやい」と声をかけながら――。「けらつしやい」は「下さい」という意味の出羽言葉。方言をうまく活用し、ほのぼのとした出羽の春を表現した。

山 寺 の 泥 絵 襖 に 花 明 り

脇本千鶴子

泥絵とは胡粉を下地にした安価な泥絵具を使った絵画で、江戸時代、芝居の看板絵や絵馬などの制作に使われた独得の風景画である。その絵の不透明で濁った色彩が却って山寺の雰囲気似合う。「泥絵」という重くて暗い語感と色彩、それに対して「花明り」のコントラストがいい。花明りの中の小さな山寺の光景が彷彿と目の前に浮かぶ。

夏 三 日 月 フ ラ イ ト の 混 む 時 間 帯

宮津 昭彦

夜の国際空港、フライトの混むのは七時前後か。発着の飛行機の曳く光と、地上のさまざまな光が交錯し、まるで大きな宝石箱のようだ。漆黒の空には金の夏三日月が光っている。夜風も涼しい。「フライト」「時間帯」という硬質な言葉を「夏三日月」が柔らかく華やかに包んでいる。空港の夜景を都会的なセンスで見事に詠い上げた一句であり、ここにも作者独自の抒情の世界がある。

ば う た ん の 献 句 の 下 田 稔 亡 し

金丸 鐵蕉

下田稔氏は長年「濱」の編集を担当し、秀れた句を発表された。作者は下田氏に遇う機会も多く親交のあったことと思われる。ある日、上野東照宮境内にある松崎主宰の「牡丹」の句碑の辺りで下田氏の献句を見つけた。その折思わず口をついて出来た一句と思う。率直な詠いぶりの中に、亡き友人を偲ぶ作者の思いが籠り、読む者の胸を折つ。

(桜井菜緒)

青田中形代を焼く白煙 中川 博秋

一見広大な加賀平野を思う。青田一色のなか遙か遠くの杜より形代を焼く煙が上がる。今日は夏越なのだと作業の手を休めこの光景を眺めたのだろう。青と白の色彩、初夏の景色が鮮明に浮かぶ。平穏な日々豊作への願いも込められている。

村の娘の杏の樹下に杏干す 藤野 智弘

納^ナ西^シ族の住む中国雲南省麗江は落ちついた街、麗江古城は世界遺産に登録されている。街中を流れる川は玉龍雪山の雪解水である。納西族の女性は働き者だ。掲句、万年雪の輝く玉龍雪山を背に杏を干している姿が清々しく、透き通った風に甘い香りが伝わってくるようだ。旅での弾む心がリズムよく爽やかにしている。小さな切り取りで大景を表現、風土をきちんと摺込んだ句である。爽やかな人柄が浮かぶ句である。

野馬追祭声まで灼けしごとくなり 市川 翠峯

暑さの極みに声までも灼けたとの表現は意表をつく。「声」という一語にはっとする。鋭い感覚、具象から少し離れ、別の角度から野馬追を詠まれているが、卓抜だ。

四方見え四方石林雲の峯 川上なみ子

ダイナミックな句である。石林は雲南省東部の景勝地。石灰岩の溶食によって出来る石柱が林立する。少数民族のイ族が住んでいる。街中の歩道は石灰岩が敷かれ白々とした街、高台より望めば四方に奇岩が聳え別世界である。またその雄大さに思いを深めたことであろう。「雲の峯」がびたりと押さえて見事である。無駄のない表現、端的な詠みが一句を大きくした。

蒼山と洱海をつなぐ稲穂波 金光 絹江

雲南省北西部の大理である。洱海は耳の形をしているのでこの名がついた。美しい湖で漁舟も出ている。一方蒼山は大理石の採れる山、その裏側で採石が行われている。この辺は氣候が良く農作物の収穫も多く、恵まれた大地である。蒼山と洱海の距離は遙かに遠く、その間は田園風景が拉がるまさに黄金街道である。「つなぐ」が実地的確な表現でこの句を締めている。確かな目で捉えた力、対象に接する心構えがあり、豊かな句になった。

雁行の羽音に喚声湧きにけり

中山砂光子

なかなか見られない光景に出会った瞬間と驚きをすっかり捉えている。以前、真雁が宮島沼を翔つ光景を遠くより見た。すごい数の雁が翔ち空がまっ暗になった。沼を曳き摺っていくような感じがした。作者は間近にこの景に出会えたのだらう。囲りの人達との感動が強く伝わってくる。よき出会いの句である。
(今井すえ子)

——平成十三年

冬麗を賜ふ身ぐるみ影ぐるみ

村越 化石

平成十二年十月に作者在住の草津・光泉寺に建立された「松虫草今生や師と吹かれゆく」の句碑開眼の心境を詠まれたものと思う。作品に生きることへの感謝と喜びが溢れている。「影ぐるみ」には肌身離さぬ杖の影も添っているだろう。

遠くまで行く風待てり蒲の絮

佐藤 斗星

大野林火が説いた「執して、離れて、遊ぶ」は作句の究極の教えだが、なかなか簡単にはいかない。特に「遊ぶ」は難しい。この句の作者は蒲の絮になりきっている。できるだけ遠くへ飛びたい。そんな風の吹くのを待っているのは、童のような作者の心であり、「遊ぶ」境地が一句を和ませた。飄逸たる作者が浮かぶ。

長き夜の妻を詠へる句の殖えぬ

杉本 寛

作者は平成十四年八月に逝去された。この句は、一年程前の作。一句に影がある。既にご自分の運命を感じしておられたのかも知れない。男は照れ屋で、特に家族の前では思っている言えぬことが多い。長き夜だから一層じんと来る。頑固になり勝ちの筆者に素直が大事と教えられた。

飾白家訓を垂れてゐる如し

岡田 透子

平成十五年九月の作者の計報には少なからず驚いた。木曾の鍛錬会でお逢いたばかりであった。掲句は最近見ることが少なくなった飾白を詠み、白のような力感でまとめられた。この家訓は、初志貫徹と一途にやり遂げることかも知れない。

人寝ねしのちの灯に寒戻りけり 宮津 昭彦

発想のユニークさに魅かれた。俳句は五感を駆使して四季の移ろいやさまざまな思いを詠むものと思っていたが、寝た後まで詠まれた掲句に唖った。若い頃は部屋を真っ暗にして眠ったが、今は防犯の意もあり、小さい灯を残して眠る。その小さい灯を修二会どきの奈良の底冷えがつつむ。掲句の通りである。

夢殿の風鐸八つ巢藁垂れ 広岡 仁

夢殿は法隆寺東院の本堂で、天平十一年に斑鳩宮趾へ行信僧都が建立した八角円堂である。本尊は秘仏救世観音。一年中俳人を含めた観光客と修学旅行生で賑わう。八角堂だから当然風鐸も八つあり揺れている。ここまでは誰も見ている。ただその一つに垂れていた巢藁を見つけた作者の眼は鋭い。雀は国宝の風鐸も住み心地がよければ意に介さない。これも一つの俳諧

であろう。

(谿 昭哉)

涅槃雪漂へる日のありながら 荒井 正隆

なんと、はんなりとした上品じょうぼんの位を領する句なのだろう。茫と漂っている日輪がありながらなお、雪は霏々と降り続いているという。降ってはすぐ消えてしまふ涅槃雪の時間と空間に、日輪を内在させたことにより、この日輪は、絶対的静寂の中の阿弥陀如来さながらである。上質の句は古典の典雅な姿をあやまたない。

白魚百一瞬に向き変へにけり 森田 博

一句の潔さ、心意気を舌頭千転して味わいたいと求めるならば、この句の右に出る句はあるまい。白魚百、つまり透き徹った白魚の二百の黒い眼が向きを変えたこの一瞬こそ、作者が出合った現うつの真まことなのである。冷徹なまなざしをもって白魚の真の「あり様」を大胆にして的確に表現し得て巧みだ。

羅白岳晴れて雪間に牛放つ

今井すえ子

羅白岳の固有名詞が生き生きと説得力を持ち、一句を統べる。平明にして真摯、雄大な景への一途な深息が伝わって来る。この句のようにポジティブで健康的な素材へは、他の何事の説明も要しない。素直に感動している作者と暫し時間を共有するがよい。朗唱すべき伝統的韻文精神の操手を提言したのは波郷だが、まさに「朗唱すべき」俳句らしい俳句と言えよう。技術的には「晴れて」の微かな転化が重要な役どころであろう。

雪原に立てばこのまま雪女

奥田 恵美

ティピカルな雪女の概念からやや外れた雪女が、なんとも魅力的な一句となった。なにしろ、我と我が身に雪女を取り込んでしまった。それは俳句を常に自分の生き方に引きつけ、不敵なまでの潔さが身についている者のみに許される詩人魂を打ち出しているとも言えよう。雪女という幻想を、自分という女性の実体に宿るかなしき、寂寞とした閉塞感などをもって現実化しようとして試みているようだ。一読すまじい句である。さて、雪女も己も解放されたであろうか。

地震の後揺れゐるごとし春の月

森川 泰雄

上五中七の措辞がのびやかな調べをもっていればこそ、地震にあつてはなす術も持たない人間の無力感と不安感をダイレクトに訴える。特に「揺れゐるごとし」の中七の切れ字は、その後の揺れの長さを現して圧巻。そして赤子が慈母へ小さな手を差し伸べるが如く、「春の月」に安堵を約す。春の月のうるんだようなあやうさが、「地震」とびたりと照応しているのも実に巧い。ああ、まだ揺れている春の月さえ。

鍾乳洞滴る音の鼓のごとし

伊藤 京子

天井からは鍾乳石が垂れ、床からは石筍が林立する石灰洞。大きく広いものは、ライトアップされて地下都市・地下宮殿さながらである。地下水が永遠の刻を打つがごとく滴っている。空洞に響くその音は「鼓のごとし」と言う。鮮明な視覚と聴覚が文^{ぶん}なして、読者を不思議の国へ誘うのである。「鼓」と捉えたところは単なる比喩を越えたその奥の、詩魂を垣間見る思いだ。爽涼たる骨格の太い抒情句。

(林香燿子)

身 ぎ れ い が 妻 の 口 癖 更 衣 荒井 正隆

身綺麗の身には心身共にの意が寓されている。「妻の口癖」と掲句はさらりとかわしているが、これは荒井家伝来の生活信条であり、私達が羨望する夫婦仲の生き方でもあると解したい。氏は豊富な語彙の持ち主。その語彙を駆使した技巧の冴えはつとに定評がある。この句、至って地味に仕立てられているが、「更衣」でびたりと決まって爽やかである。

投げ入れの 菖蒲の 丈に 飾り 大刀 田口 俊子

花器にどさと投げ入れられた菖蒲の凜然たる青さと、それに比肩して飾られた大刀の華麗さが、この句のよろしさを引き立たせている。着物姿のよく似合う作者の立ち姿を思い浮かべれば、この句のもつ句趣のつましさと美しさを諸うことが出来る。

おだやかな顔して 水を 打ちに けり 岡田 鉄

いい俳句は作意を弄するものでなく「向うからやってくる」とか「賜るものである」とか言

う向きもある。しかし棚からぼた餅式に落っこちてくるものでは決してない。それには長い間の作句の鍛錬が必要だ。作者の句は実にさりげないが、そういう訓練をつんだ結果だ。言葉の幹旋は心にくいばかり。「おだやかな顔」これがくせ者だ。

送り 火の 灰に 大粒 山の 雨 竹中 龍青

作者と私は信州の東はずれ、同郷の士である。この地方では旧盆は大事な年中行事の一つである。一家総出で麦藁や稲藁を焚きあげ、その煙に乗せて祖先の霊を迎えそして送る。「盆さん盆さんこの煙に乗ってお帰りやす」と古老は唱える。やがて送り火は消え山気が闇を濃くする。その瞬間音を立てて雨が来た。灰をパツパツと散らす、雨粒の大きさに作者は驚く。それはまさに魂鎮めの一瞬であった。

林 火忌の この 道 行くに 泉あり 村越 化石

「一人になっても俳句を続けたまえ」との林火の励ましにこたえて精進を続けて来た作者にとつて、「林火忌」の詠い出しには、万斛の思いがこめられていることは言を待たまい。その日作者は杖を先だてて道端に立つ。この道は泉へ通ずる一本の道である。やがて滾々と湧く泉

の音を聞き、青く広がる水輪を化石氏はその心眼でしかと見届けたのであろう。

白地着て父の背丈を思ひをり 杉本 寛

作者が晩年、闘病生活を余儀無くされたことは残念であったが、句は淡々と詠われた中に深く思いがこめられて私は共鳴する処が多かった。掲句、石燈籠の立つ庭に面した居間に、白地を着て父君を想起して端座する故人の面影が彷彿とする。父君は日中友好に尽力され、品川区長も勤められた。

(小山橋雨)

——平成十四年

神の旅 日本海の闇濃かり 石井たを子

一句が描いているのは目に見えない「神の旅」の壮途。「日本海の闇濃かり」と言い切ったカ行音に句はおおどかに深遠。国引の神話の大八洲を北方より俯瞰したスケールの大きな句柄であり、その漆黒の闇は出雲神話へのロマンを掻き立てる。

冬瓜には冬瓜の味の喜寿の膳 勝亦 年男

一読、菜園を作り自然食を旨としている恬淡な作者の人柄が伝わる。一句の味わいは、男が平均寿命に達した祝いの「喜寿の膳」と、「冬瓜」との取り合わせの俳味。持って生まれた自分の性をしみじみと諸う自存とそこはかな気骨。幾分笑いを含みながら歳月のかなしみを感じさせるのは、一に「冬瓜」の季語の働きである。

紙漉けよ漉けよと水の流れ去る 高橋美智子

座五への語調のイメージから、描かれているのは紙漉村の水——川の流れである。作者の目線位置は、引樋により水が注がれている晒し場を手前にした漉屋の軒先だろう。漉屋より少し下った本流の岸辺までの、わずかな距離感も伝わる。「漉けよ漉けよ」のリフレーションに、潺潺の流れの水音が作業者に語りかけている光景が見える。村人が常に親しんでいる川を主体とした詠み方に、奥深い山村の景色が一体となっている新味がある。作者の住地から察すればそこは黒谷か。林火先生の「紙漉のこの婆死ねば一人減る」をふまえた佳品。

寒 昂 背 筋 より 酔 ひ 醒 め ゆ け り 西形佐太郎

存分に酔った作者が家路を辿る一駒。牡牛座の身が引き締まるように青白く光る六連星「寒昂」の美しさ。それを仰ぎ見つめて心充たす作者の孤影が浮かぶ。「ゆけり」には年月・時間の経過がある。作者は昔日に飼育した「牛」の面影をかさねたか。「酔ひ」という日常生活の所作と、宇宙系から光年の距離に光り輝く「寒昂」との取り合わせの妙。「背筋より」の直感が作者の眩きとなって、そのままに一句を成さしめている。

晴 着 の 袖 い ろ い ろ 使 ふ 初 笑 ひ 谿 昭哉

一句の眼目は「いろいろ使ふ」。娘たちがはれぎぬに振る舞う「初笑ひ」の場面が、袖模様の色彩感を伴って、正月の気分をいっそうめでたく明るくしている。和服における女性の嗜みの「笑ひ」の淑やかなしぐさは各人各様であり、そこに着目した作者の鋭い詩心がある。

雲 雀 野 に 一 打 一 寸 杭 打 て り 恩田 甲

「雲雀野」の季語を配して、「一打一寸」の具象に芸がある。垂直に杭が打ち込まれてゆく大地の手応えが、読み手に直に伝わる壮快な一句である。春たけなわの田園・丘陵の大地に親しみ杭を打つ一農民の所作に、関東ローム層の地質と地貌をも言い止めている。農に従事する者の歡びは、作物の成育に見られる大地の手応えの感得。この句には作者が農民の心と一体化した、自然鑽仰の思いがこめられている。
(竹中龍青)

啓 蟄 の 地 を 蹴 つ て 子 の 逆 あ が り 富田みのる

啓蟄の季語が一句によく響いている。子供の頃、逆上がりの練習をした記憶があるわたしたちは、「地を蹴つて」の情景を、体を通した感覚で味わうことが出来るので、この句がいつそう楽しい。春めいて気温が緩み、上中に蟄伏している虫たちが這い出ようとしている土には、目には見えない生命の力がある。無心に地を蹴って逆上がりをする子供も、啓蟄の季語そのもののように、生命力に溢れているのである。

絵 硝 子 に 油 の や う な 春 灯 神長 裕子

すぐに思い浮かぶのは大正ロマン風の小さな洋館の窓である。そんな窓の絵硝子は、図柄も

日本風の花や、鳥などがモチーフになっていることも多い。日の光を通す時には、モダンでありながら、ほのぼのと親しい感じがある。室内に灯が点ると、模糊とした色合いの軟らかな光が外に洩れ、道行く人を楽しませる。「油のやうな」が、その辺りの雰囲気余す所なく伝えている。穏やかな春の夜である。

抱 き る し 石 を 落 し て 山 笑 ふ 後藤 房枝

「山笑ふ」の擬人法にもう一味付け加えた手法が見事に決まって、思わず膝を叩きたくなる。春の雪解けの頃の雪崩や、落石は災害をもたらして笑い事ではないが、人里稀な山深い所で起きた音を聞き止めたのだ。木々の芽吹き頃、山は日々色が変わる。山に生気の満ちるとき、落石の音は、山の笑い声とも聞こえたであろう。

大 空 へ 顔 少 し 向 け 更 衣 村越 化石

「大空へ」の詠い出しが伸びやかで、心地良い。作者にとって大空は、日々の喜びであり、幸先のよい未来の象徴であろう。この年の秋、作者は六十年ぶりの帰郷を果たされた。それは、誌友にとっても嬉しいことであつた。そして「顔少し向け」も、思ひの深さの見える語である。

何気ない動作を通して、ささやかな幸せを願う気持ち伝わってくる。軽やかな衣服に通う風のように清々しい、練達の句と思う。

新 緑 や 大 使 の 馬 車 へ 白 き 拳 手 竹腰千恵子

外国の大使が新しく着任すると、信任状を奉呈するために宮中に参内される。迎えに差し向けられた馬車が今しも皇居の門に差しかったところ。「白き拳手」と、皇宮警察官の白い手袋に焦点を当てて、眩しいような情景を浮かび上がらせたのはさすがと思う。季語の「新緑」がびたりと決まっている。他のどの季語を持ってきたても、この季語の果たす役割、味わいに勝るものはない。

麦 秋 の 貨 車 より ぼ ん と 人 が 降 り 恩田 甲

「麦秋の」で軽く切れた後、「貨車よりぼんと人が降り」と緩やかに続いて、貨車が速度を落としている間を感じさせる。掲句に惹かれるのはこの物語性にあるようだ。麦秋を来る貨車を遠景で捉える。ズームアップして寄ると、身を乗り出している男が一人。徐行するのをみずまして飛び降りた慣れた身のこなし。「ぼん」の擬語が軽やかで、即物的な実感を伝える。力強

い貨車との対比も鮮やか。何か始まりそうな予感が楽しい。

(田畑幸子)

たかんなのしづかなる丈見せにけり

宮津 昭彦

この句のポイントは「しづかなる丈」にある。その措辞が抜き差しならぬものであることは、これを他の言葉に置き換えてみるが良い。いずれもびたりとは来ない。たかんなのすつくとした立ち姿はもとより、薄暗くひっそりとした竹藪の佇まいをも言うにはこの語をおいて他にない。同時に見逃してならないのは「見せ」である。それはとりもなおさず「たかんな」の矜持でもあるのだ。

檜の葉を空蟬の爪貫けり 森田 博

即物とはこれという。ただ物を呈示しただけ。だが、ただの写生句ではない。この句を通して作者の強い生命感が伝わってくる。それは一にかかって「貫けり」にある。脱皮するとき懸命に縫った檜の葉。その堅い葉を空蟬の爪が貫いているというのだ。空蟬だからよい。形骸だからよい。介在する時間を通じて空間が広がる。まわりの湧き立つような木々の緑、さらにはその蟬が飛び立った空の青さまでもが見えてくる。

暁 蛸 前山 迫りくるごとし 内村 才五

自然が夜の闇から蘇ってくるその静かな力とでも言おうか。蛸の鳴き始めはまだ夢の中。それが次第に数を増すにつれて現へと移りゆく。「前山迫りくるごとし」はそのことを言う。暁紅を背景に前山の黒いシルエット。それが蛸の声にうながされるように刻一刻夜のベールを脱いでゆく。あたかも蝶が羽化するように……。そうした中で今日というひと日が力強く立ち上がってくるのだ。

うるか 壺 翠 巒 の 闇 封 じ け り 林 香 燿 子

この美的感性にうたれる。「うるか」は鮎の腸を塩漬にした酒の肴。封ずるとあるのでその壺はおそらくは蓋付きのものであらう。その中に翠巒の闇があるという。だが、その闇は当然見えてはいない。ただ想念の中にあるのみ。またそれが想念であればこそ四圍の嶺々の緑をもその闇に溶け込ませることができるのだ。耳を澄ませば鮎の棲む清流の瀬音さえ聞こえてくる。

露 一 夜 明 け 一 塊 の 石 座 る 村 越 化 石

その境涯を知るものにとつて、いかようにしてもこの作者の心奥を窺い知ることは叶うまい。「化石」の俳号に作者の強い意志と覚悟を読み取るとしても、これまで変遷を重ねた心の葛藤はいかばかりのものであったか。それを思えばこの句についても軽々な鑑賞は許されまい。願うべくは、この句に見られる自然への同化あるいは没入が作者の究極の安らぎであること、それのみである。

待 宵 や 一 刻 水 の ご と く 座 し 関 川 竹 四

作者はこの句を詠まれて後、ほどなくして亡くなられた。この句、その静謐な趣にうたれる。「待宵」と「水のごとく座し」が得も言われず響き合う。このように生き、このように逝かれたであろうそのお人柄に接する思いである。
(佐藤真次)

—— 平成十五年

沈 む 日 の 冬 至 へ 急 ぐ 姿 な る 宮 津 昭 彦

冬ざれの景の中で、寒く暮れやすい日が、心ほそさを一きわかきたてる。太陽がもつとも北半球から遠ざかる冬至は、この日を境にして、昼は長く夜は短くなつてゆく。寒々とした暗さから一日も早くぬけだしたいという気持ち「冬至へ急ぐ姿」と見た作者の心持ちなのである。普遍的な自然の大景を見事に捉えた句。

綿 虫 の つ れ な く 人 に 近 づ か ず 岡 田 鉄

秋から冬にかけて、風のない夕方に綿虫は群れる。こちらから近づくといつの間にか消え、次のところにいつの間にかまた群れている。静かな夕の空中を飛んで移動するので、独特のやさしい雰囲気をもっている。作者は決して人に近づかない綿虫を「つれな」と嘆く。擬人化して綿虫の心を表現した作者の眼は確かで、非常に新鮮である。

奥津軽雪雲の地とつながれり 川上なみ子

晴れた日の「冬の雲」は美しく見えるが、「雪雲」は、曇天が垂れこめいまにも雪が降りそうなる空模様。天気朦朧として日の光が連日見えない奥津軽は、どんよりと垂れこめて暗く重い空に地も海も一体となつてつながっている。「つながれり」とだけしか言っていないが、情景がくつきりと眼に浮かぶ、省略の利いた写生句である。

まほろばの塔に日の差す初景色 谿 昭哉

作者は大和の人。この塔は薬師寺の東塔西塔と思われる、初詣の景であろう。「大和は国のまほろば」とは、すぐれたよい所と大和をたたえた言葉。そのまほろばの塔に初日が差している。初景色とまほろばの一对の語のなんと目出度いことか。作者の新年を迎える清々しい心が、明るい中にも厳かに伝わって来る淑氣満ちた句。

七十路のわが齒もて噛む年の豆 茂里 正治

そもそも齒と書いてよわいと読み、齒は年齢そのものである。平均年齢世界一の日本では、七十路はまだまだ若い。「わが齒もて噛む」に、これからもやらねばという強い意志が感じられる。作者には今後もライフワークとして句を作り続けることと思う。

北風すさぶ土と化しゆく諸の蔓 堀田 政弘

以前は、諸の蔓を天干して牛の飼料にし、無駄なく利用していた。掲句は、掘ったあとの蔓を放ったまま腐らせている景であろうか。諸掘りの情景や諸そのものの句が多い中、蔓を詠まれた句は誠に新鮮。「土と化しゆく」と最後まで作者の眼が行き届いている。「北風すさぶ」の季語も適切。荒涼とした実景が、句の重さと強さをずっしりと感じさせる。
(藤野智弘)

地吹雪の夜の明け何もなきごとし 北原東洋男

「何もなきごとし」という平凡な言葉が、この句に千貫の重みを与えている。毎年のことと慣れてはいるものの、昨夜の地吹雪の凄さに、身の毛も立ち立つ思いで過ごした一夜であったことも、描かれている。何もなきごとしは、普通に使われている言葉であるが、作者は俳句として、初めて出会ったのである。この言葉が、前半の説明的な叙述に生命を吹き込み、改めて自分の

俳句に向き合わせたと、言つてよいだろう。

亀鳴くにわが身の虫も出て遊べ

中澤文次郎

獅子身中の虫というが、人の心に巢喰つた虫は手強いものだ。殊におこりの虫、鬱の虫などは、時々機嫌を損ねて、日常生活を暗いものにする。常に前向きに生きて来たのだろう。さまざまな苦勞を背負いながら、哀歎を大きな懷に受けとめて、悠々と明るく暮らしている作者の姿が泛んで来る。亀鳴くという虚の季語が、わが身の虫に照応して、出て遊べと軽く呼びかける文体となった。軽みの境地を窺わせる句である。

摂心の比叡泊りや谿鶯

梅原 美子

摂心という言葉に、作者はどのようにして出会つたのだろうか。千日回峰の行の如く追つて来るこの言葉は、比叡山の宿坊に泊まつた暁に、賜つたものだろう。眠るのを惜しんで迎えた明け方。鶯の声に詩心が高揚し、集中した状態の自分に、真正面に対峙した心の有り様を、捉えた言葉が摂心であった。物に応じて心が動き、句がなる時、真実の作者が一句の裡に籠められるのである。

折り膝の梔子の力や牛角力

竹中 龍青

見物人が今、拳に力が入り、牛と共に荒い呼吸になつて光景を想う。相闘う牛の動作が「折り膝の梔子の力」の発見によつて、臨場感を持つて迫つて来る。人間の思惑を外に、牛の生存競争としての本能がぶつかり合い、互いに捻じ伏せようとする渾身の力が漲り、牛の巨軀から焰立つものが見えるようだ。

大原女の茅花ながしに吹かれ行く

坂根白風子

森田曠平の絵を見る思いがする。「京へ」と題する屏風絵には、四人の大原女と一人の少女が描かれている。茅花の穂綿こそ飛んでいないが、これに近い情景であろう。京へ向かつて大原の里を歩いて行く、大原女の藍染の着物と御所染の帯が、吹かれ飛ぶ茅花により、緋のようになり、大原女の顔が生き生きと映し出される。足早に歩く大原女が一層早くなったようだ。

鳴く墓の腹式呼吸することし

森本 数子

藝の姿や動作に、人生や思いを託した句が多い。この句は写実に徹しながら、呼吸法を意識した点で、現代的なものを感じる。呼吸法に、胸式呼吸と腹式呼吸があるのは周知のことである。腹式呼吸という言葉が出て来たのは、リラクゼーションに関心を持っているか、歌うことが好きなのであろう。藝が鳴く姿を見て、腹式呼吸と素早く捉えたのは、日頃、最も関心を持っている事に、右脳が閃き反応するからである。

(櫻井康敏)

糸とんぼ己透けるも影濃かり 乃美 隆子

糸とんぼに執した句である。透ける羽と細い体の命のたしかさを「影濃かり」と言い切り、美事に糸とんぼを現している。一読後、糸とんぼが羽を休めるあたりに秋の澄み切った佇まいを感じさせる。作者の研ぎ澄まされた感覚が生きている。

鰻食べて陰なき真昼帰りけり 坂根白風子

事実だけを述べている句だが、この鰻が京・大阪の夏の祭に欠かせない「祭鰻」とわかればこの句の受けとめ方は深まる。暑い祭を見て鰻を食べないと折節のけじめがつかない作者なのであろう。鰻は骨切りというやっかいな手順を踏んで料理する。それが淡白でほろっとした食

感となる。胃の腑に鰻を食べたという淡い感じを持ちながら陰なき真昼を帰る、作者の満足感に充ちた足取りが感じられる。

土用風海底の靨青黒し 小林 雪雄

北海道の短い夏の土用風。砂浜ではそんな一時を惜しみ海水浴を楽しむ人達で賑わう。覗き込んだ海の中は、藻の揺れや魚の泳ぐ姿がなければ水の存在すら忘れてしまう程透明で静かである。海底の岩は地球誕生の靨を物語るかのように幾重にも畳み、豊饒な海の証の藻を被て青黒い。「海底の靨青黒し」で北海の神秘の一端を垣間見た実感が出ている。

盆灯籠この世の起居うつしけり 武田 幸子

盆灯籠は帰って来た仏様を照らす灯である。作者は灯籠のもう一つの面を見つけた。灯籠があたかもビデオ撮りをしているように人々の起居を余さずうつしているという。仏様が来て見ているという実感を灯籠にもたせた句である。

ひと時雨ありて去来忌つとめ終ふ

茂里 正治

平成十五年九月、京都の真如堂に去来の墓の案内板が三百年忌を記念し建てられた。その世話人を務め終えられた作者に京都らしい「ひと時雨」の労いがあり、安堵感となつて伝わる。去来への思い入れの深さが感じられる句である。

稲刈りて能登の嫁取り披露せり 坂 北濤

能登には「賽のこと」など稲作に関わる珍しい習俗が残っている。稲刈りで嫁取りを披露とは貴重な祝言儀礼を物にしている。新しい労働力となる嫁の力量の披露も兼ねるのかも知れない。失われて行く日本の習俗を地方の俳人が句にとどめて置いてくれるのはありがたいことである。

(中山フジ江)

あとがき

「濱百句」は「濱」三百号記念号にはじめて掲載された。当時の主宰、大野林火先生の発案であった。以後、記念号ごとに、恒例のように掲載されてきた次第は、冒頭の凡例に記されているとおりである。

今回、七百号を迎え、記念出版のひとつとして、平成六年以降の作品から新たに百五十六句とその鑑賞を加えて『濱七百句』をまとめることができた。

最初の「濱百句」のとき、林火先生の作品は、先生ご自身のご意向により、選句の対象としなかった。以来、主宰の作品は同様に扱わせてい